第四講　文学部　芸術論・建築論

次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

日本住宅の平均的なイメージは今日でもいまだに、畳の部屋がいくつかに仕切られ、床の間を持つ座敷からは、南側に配された庭を眺めることができるといったものだ。日本の伝統において、庭こそは［ 1 ］だったのであり、建築はむしろその付属物にも似た地位にあった。南側に設けられた庭を中心に建物の部分空間が統合され、その結果、日本の住宅建築を代表するいわゆる書院造、数寄屋造といった様式では、庭のまわりに雁行形に家屋が配置されることになる。そこでは必然的に家屋と外部空間が密接につながり合い、庭のデザインと建物の構成は連動していた。空間はあくまで水平方向に連続し、〈縁〉が庭と住宅との曖昧な境界として機能した。

書院造に比べてより非相称性を強めた様式が数寄屋造と呼ばれるが、前者が後者に変化する契機となったのがまさに〈数寄屋〉、つまり草庵茶室であるとされる。そして、草庵茶室の最も純粋な原型は、茶の湯を大成した千利休によって作り上げられたといわれる。だが、利休の茶室は本来むしろ、数寄屋造を含めた日本住宅の伝統にまったく逆らう〈反住居〉であり、〈反日本建築〉であったとさえいえる。伝統的な日本建築が壁ではなく、柱主体の構築であり、空間の分節を襖や障子といった取り外し可能な建具によっておこなう開放的な構成であったのに対し、茶室は土壁に囲い込まれた密室である。草庵茶室は確かに露地と呼ばれる山中の情景を模した庭のうちに建てられるが、しかし、利休の茶室においては、茶室内部からこの庭を眺めることはできない。そして建築における〈日本的なもの〉の古典性は、やがてこの〈近代〉の視座から遡及的に構成されることになる。窓（それが日本建築の構成要素となるのも利休の草庵茶室以後である）はおもに座敷に明かりを採り入れるためにある。空間は内部と外部に峻別される。客の出入口である躙口は横幅と高さが二尺（約六〇センチ）ほどの小さなもので、身をかがめて這い蹲らなければ入り込めず、さらにこの内部空間の閉鎖性を強めるように、末客は躙口の戸を閉めて戸に付いた掛け金を降ろす。なるほど時代を下れば、窓を増やし大きくして、外界との連続性が復活する傾向も見せるとはいえ、茶室内部は基本的に〈室〉という語の原意に近い、非常に閉鎖的な空間であり、特段の装飾を欠いた無季的で空虚な〈空き家〉（岡倉天心）だった。A茶

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

座敷と露地との差がない〈ぬるさ〉を嫌って、利休は茶室を南向きに建てたともいわれる（堀口捨己（ほりぐちすてみ）による）。
　この暗い部屋は住居ではなく、茶室そのものの閉じた構造のみならず、露地内の中潜りや中門など、いくつもの結界によって囲まれた聖所であり、芸能としての茶の湯が演じられる［ 2 ］だった。躙口を利休が思いついたきっかけは川辺に浮かぶ船の潜り戸であるとも伝えられるが、一方、演能場や歌舞伎の芝居小屋に入る出入口の鼠（ねずみ）木戸との類縁が指摘されている。われわれの言葉で言えば、茶室の内部とは〈表象〉の空間にほかならなかった。そうした可能性を保証するのはこの場合、内と外の徹底した分離である。閉ざされているからこそ、床に生けられた花はただ一輪で自然の四季を表す。点前（たてまえ）のふるまいは日常的な身ぶりの美を集約したおこないとして立ち現れる。

　茶の湯と茶室が十六世紀末に、貿易都市堺の商人であった千利休によって完成されたことは偶然ではあるまい。このいわゆる桃山時代、ヨーロッパではルネサンスからバロック、あるいは古典主義時代へと文化と知の構造が大きく変貌したこの時代にあっては、世界に関する知は世界それ自体からではなく、その〈表象〉の分析を通じて得られるものとなる。古典主義時代のこうした知の構造のモデルとされるのが、〈暗い部屋（カメラ・オブスキュラ）〉と呼ばれた（注）ピンホール・カメラだった。この光学装置は当時、人間の視覚や認識活動を説明するために好んでモデルとして利用された。それは外界から切り離された空虚で独立した空間を作り出し、その暗闇の中に外界の表象を映し出す仕掛けである。世界を知るためには、外界との直接的な遭遇を避けて、この閉ざされた空間内に自己を位置づけることこそが必要とされる。〈われ思う〉の内省から〈われ在り〉の存在を導くデカルトにとって、精神とはこのカメラ・オブスキュラの内部空間にほかならない。そこでは知覚や認識はあくまでこの内的空間における精神の自己観察なのである。

　デカルト的主体がカメラ・オブスキュラによって表象されていたとするなら、茶室という〈暗い部屋〉は、日本の貿易の中心地であり鉄砲の最大生産地でもあった自由都市堺の政商千利休の、強烈な〈個〉の意識を明確にした主体のモデルであったといえるのではないだろうか。主客の区別が判然としない寄合の茶とは異なり、利休の茶では明確に分離された主と客（茶室はこの両者の動線が決して交わらないことを原則とする）が四畳半から二畳という極小の空間内で対峙（たいじ）する。身分の上下は原則的にこの空間内では無視される。町衆と呼ばれた商業資本のブルジョワジーにおける［ 3 ］をそこに認めることはおそらく誤りではないだろう。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

茶室はいわば個の自覚を得たブルジョワジーの私的な祭祀（さいし）の場所であり、いわゆる〈数奇者〉がその好み＝数奇に合わせて作り上げた空間である。そこでは室内の部分を形成する部材や世界各地から集められたさまざまな物品が、主人の好みに応じて、時には意表をつく形で配置され、B<u>〈見立て〉という記号系の翻訳システム</u>によって意味の統一を与えられる。そして、茶の湯とは一種の〈主体化〉の作法だった。それは桃山時代という激動期に、政治の中枢に直結した商人という身分ゆえに村落共同体的な集団の束縛をいち早く脱した個人が、極小の閉鎖的空間内に客共々にこもって執（と）り行った、［甲］を高め合う儀式だった。

（田中純（たなかじゅん）「利休の〈暗い部屋〉――草庵茶室の空間」より）

（注）ピンホール・カメラ……レンズではなく針の穴を利用した写真機。

問1　本文中には、その内容から言っても、論旨の展開から言っても、余分な文が一つだけ挿入してある。その文の最初の五字と終りの五字を記せ（句読点や記号も一字と数える）。

問2　文中の［1］～［3］に入るもっとも適当な語句を、それぞれ次の中から選びなさい。

1　イ　モダニズム美学の極致　　ロ　文化的表現の舞台
　　ハ　日本建築史における特異点　　ニ　建築空間の再現

2　イ　演劇性に満ちた都市　　ロ　即物的な舞台
　　ハ　機能化された密室　　ニ　非日常的な空間

3　イ　自我意識発生の表れ　　ロ　世界認識の逆転現象
　　ハ　身分制度超越の萌芽（ほうが）　　ニ　想像空間の形成

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問3　傍線部A「茶座敷と露地との差がない〈ぬるさ〉を嫌って」と同じ意味をもつものを、次の中から選びなさい。

イ　昼なお薄暗い室内と外部空間とのコントラストを強めようとして

ロ　日本建築の古典的な性格をそのまま受け継ぎ、それをより深めようとして

ハ　外界との連続性を取り戻し、そこに明確な文化人の主体化の試みを示そうとして

ニ　それぞれの用途や芸の領域内において、茶室が自らの完結した評価体系を持つようにして

問4　傍線部B「〈見立て〉という記号系の翻訳システム」の説明として、もっとも適当なものを、次の中から選びなさい。

イ　実際のものを一度全てばらばらにし、一人の強烈な個性によって取捨選択して価値づけようとする試み。

ロ　種々雑多なものが、本来の性質を超えて表象のレベルで新たな意味を持ち、つながりを持って行くかたち。

ハ　一人の人間の好みによっていろいろなものに新しい色彩を付与し、全く違った生命を発見して行く方法。

ニ　ものの持つ象徴性に目を向けることを通して、世界を全てシンボルの宇宙と考える思考様式。

問5　文中の［甲］に入るもっとも適当な語句を、本文中の三字から五字の一続きの部分で抜き出して記せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　田中純＝たなか　じゅん（一九六〇〜）宮城県生まれ、東京大学教養学部卒。思想史が専門

●岡倉天心＝おかくら　てんしん（一八六三〜一九一三）神奈川県生まれ、東京大学文学部卒。東京美術学校（東京芸術大学）の創立に関わる。主著『東洋の理想』『茶の本』

●堀口捨己＝ほりぐち　すてみ（一八九五〜一九八四）岐阜県生まれ、東京帝国大学建築学科卒。建築家。

●千利休＝せん の りきゅう（一五二二〜一五九一）草庵の茶の完成者と言われる

●ルネ・デカルト（一五九六〜一六五〇）フランスの哲学者、数学者、傭兵。主著『方法序説』『哲学原理』。近代哲学の祖と言われる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

語句

雁行＝がんこう→渡り鳥の雁が隊列を組んで飛行する姿から、V字型、コの字型

相称性＝そうしょうせい→左右対称・シンメトリー。これが崩れると非相称性・アシンメトリー

峻別＝しゅんべつ→厳しく区別すること

結界＝けっかい→仏道修行のための区分。聖俗の境界

点前＝たてまえ→茶道で抹茶を立てる作法。てまえとも発音する

見立て＝みたて→和歌や詩で、あるものを他のものになぞらえて表現すること。比喩

表象＝ひょうしょう→表現作品（映画を表象文化というように）の意味と頭の中に描いたイメージ像の意味がある

即物的＝そくぶつてき→情緒や芸術性がないこと。現実の利害を重視すること。主観を入れずに物そのものを描くこと

コントラスト→対照・相違・対比。対象は、対象物の意味で、英語ではオブジェクト。対称は、きれいに幾何学的な左右対称で、英語ではシンメトリー

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講

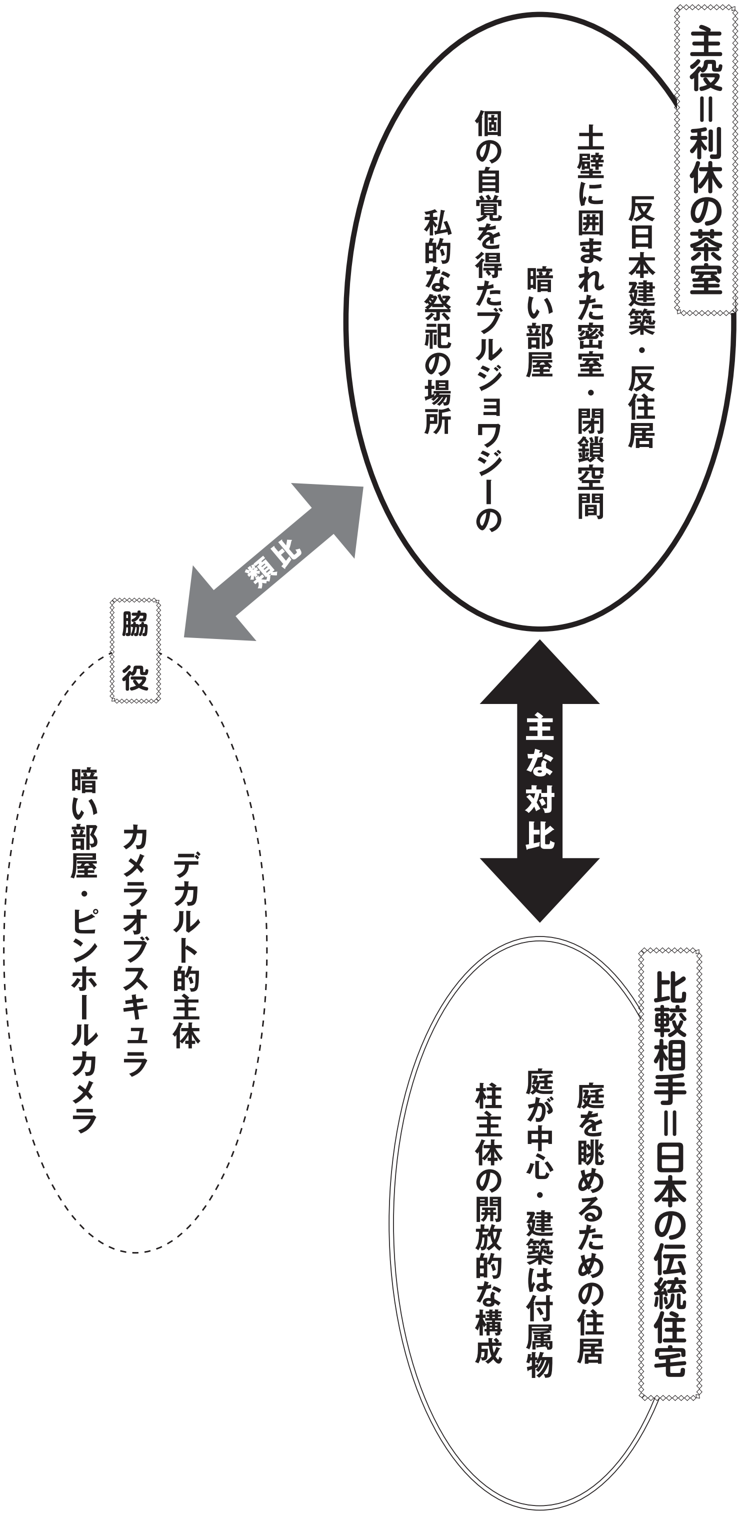
次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）左右の相ショウ性を強める　①称　②照　③象　④性　⑤床
（イ）時代の変化の契キとなる　①期　②奇　③機　④来　⑤軌
（ウ）部屋のソウ飾を排する　①奏　②装　③創　④荘　⑤招
（エ）無機的で空キョな建物　①据　②去　③虚　④嘘　⑤拠
（オ）日常の美を集ヤクする　①役　②訳　③躍　④厄　⑤約
（カ）直接的な遭グウを避ける　①隅　②偶　③寓　④遇　⑤宮
（キ）自らを内セイしふりかえる　①政　②正　③静　④省　⑤誓
（ク）向かい合って対ジする　①地　②自　③峙　④持　⑤治
（ケ）主客の区別がハン然となる　①範　②判　③版　④頒　⑤伴
（コ）意ヒョウをつく配置をする　①表　②評　③票　④標　⑤漂

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　文学部　芸術論・建築論

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問1《余計な文の指摘》

前後の文とつじつまが合わない不適切な文を見つける問題は、早稲田大学が好んで出題する設問形式です。選択肢問題ならば、対比混乱の誤りや正しい対比喪失の誤りと呼ぶような箇所を、文中から見つける作業と考えてください。

日本住宅の伝統や平均的イメージを語った第一段落が終わり、千利休の茶室の特別さを語っている第二段落、ここに注目してください。庭を見るために開放的な作りになっている伝統的な日本住宅に反し、「密室」です。「茶室内部からこの庭を眺めることはできない」のです。「窓」はあるけれども、庭を見るためではなく「明かりを採り入れるため」です。そういう話の流れの中に、突然「そして建築における〈日本的なもの〉の古典性は、やがてこの〈近代〉の視座から遡及（そきゅう）的に構成されることになる。」というヘンな文に出会います。「〈反日本建築〉」の話をしているのに、いきなり「〈日本的なもの〉」の話になっています。まず、この違和感に気付けるとよいですね。

これ以外のおかしな点も指摘しておきます。それは、「この〈近代〉の視座から」です。たしかに、利休の茶室は、「個の自覚」を高めるもので、近代的な性格をもっています。しかし、それらについては、ずっと後の段落、第五段落以降に書かれる内容です。したがって、第二段落で「この〈近代〉の視座から」と出すのは突飛すぎです。

さらにもう一つの違和をお伝えします。「そして建築における〈日本的なもの〉の古典性は、やがてこの〈近代〉の視座から遡及的に構成されることになる。」だと、千利休の茶室と日本の伝統建築が連続したものであるかのようです。これじゃ対比混乱です。以上のように、コテンパンに間違えてますね。

問2《空欄補充・選択肢》

1　「日本の伝統において、庭こそは［1］だったのであり」とありますから、主役（千利休の茶室）ではなく比較相手の説明になります。空欄前後にヒントがたくさん出てきます。「庭を中心」「建築はむしろその付属物にも似た地位」とあります。つまり、建物は「庭を眺める」ためのいわば客席で、庭こそ見るべきステージというわけです。したがって、ロの「文化的表現の舞台」が正解です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

他の選択肢を吟味します。イ「モダニズム美学の極致」はどうか。「モダニズム」は近代主義（現代主義）ですから、コンクリートとガラスを多用した近代建築を想像してしまいます。これじゃ「伝統（いわばプレ・モダン＝前近代）」に反します。記述に反する誤りと言えます。ハの「日本建築史における特異点」はどうか。「特異点」は異質で特別なものという意味です。それは千利休の茶室に当たりますから、対比混乱の誤りです。ここは、日本建築史の流れ、そのまんまでないとね。ニの「建築空間の再現」はどうか。「再現」ではダメです。「中心」の言い換えでないと。記述に反する誤りです。

2　「芸能としての茶の湯が演じられる 2 だった」とあります。主語は「この暗い部屋は」です。つまり、千利休の茶室の説明になります。つまり、「密室」「非常に閉鎖的な空間」であり、住むための住居ではなく、茶の湯が演じられる「聖所」「日常的な身ぶりの美を集約」した場所です。ニの「非日常的な空間」が正解です。いいですか、日常そのままではなく「日常的な身ぶりの美を集約」ですからね。お茶を飲む場所といっても、喉がかわいてゴクゴク、プハー、おかわり！　じゃありませんからね。芸術芸能としての茶なんですから。

他の選択肢を吟味します。イはどうか。「演劇性に満ちた」はOKですが「都市」が×です。デカイですね。もう密室じゃなくなってます。記述に反する誤りです。ロはどうかな。「舞台」はOKです。ところが「即物的」がイケマセン。これじゃものの情趣、感動や感激などおよそ芸術芸能に反することになります。記述に反する誤りです。ハは「密室」はもちろん○ですが、「機能化された」が×です。〝茶室の畳を裏返すとシステムキッチンがせり出してきます、うわ、機能的！〟〝炉がなくても湯が沸かせるＩＨクッキングヒーターを採用しました、うわっ機能的！〟って、違うだろ！（スミマセン、長々と一人でノリつっこみをしてしまいました）。つまり「機能化」とはそういうこと。「空虚な〈空き家〉」とは似ても似つきません。はい、記述に反する誤りです。

3　「ブルジョワジーにおける 3 」は、次の段落で、「茶室はいわば個の自覚を得たブルジョワジーの私的な祭祀（さいし）の場所」と言い換えられています。また、伝統的な「村落共同体的な集団の束縛」に対する「個人」重視であり、「強烈な〈個〉の

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

意識」の言い換えになります。したがって、イの「自我意識発生の表れ」が正解です。
では、他の選択肢を吟味してみます。ロの「世界認識の逆転現象」は、全然間違いとは言えませんが、内容が不十分です。どんな「逆転」なのか、個・個人重視への逆転だよと言ってくれないと不十分です。イはそれを語ってくれました。ゆえにロは不採用です。ハの「身分制度超越の萌芽（ほうが）」はどうか。本文にもあるように「私的」なものです。「制度」というような社会的・公的なものではありません。茶室の躙口（にじりぐち）は小さすぎるから武士は刀を持ち込めないとか「身分の上下は原則的にこの空間内では無視される」とありますが、その場かぎりのお約束ということで、身分制度を改変するようなきざしではありません。さらに、「商人という身分ゆえに」ともありますように、「身分制度」を超えるようなものではありません。記述に反する誤りです。ニはどうか。「想像空間の形成」とありますが、「想像」が×です。現実ですよ。記述に反する誤りです。あるいは、〝伝統と反伝統〟がこの文章の対比ですから〝現実と想像〟では、正しい対比喪失の誤りと言えます。

問３《傍線部説明・選択肢》
傍線部「茶座敷と露地との差がない〈ぬるさ〉を嫌って」は、茶室をつくった千利休の考えです。「ぬるさ」とは、伝統的な日本住宅の「曖昧（あいまい）」さのことです。つまり、庭が見えるように建物と外とは「連動」「連続」して「開放的」であった。これに反して利休の草庵茶室は、「内部と外部に峻別（しゅんべつ）（厳しく区別）」されていた。したがって「室内と外部空間とのコントラストを強めようとして」としたイが正解です。コントラストは対照・相違ということです。
他の選択肢はどうか。ロの「日本建築の古典的な性格をそのまま受け継ぎ」は、あきれかえってでんぐり返ります。比較相手の方を答えてしまいました。これを対比混乱の誤りと呼ばずして他に何と呼ぼう！　ハは「外界との連続性を取り戻し」が、×。これまた対比混乱の誤りです。ニは「茶室が自らの完結した評価体系を持つ」がダメ。いい茶室か、そうでないかの評価、茶室評価ランキングの基準などいっさい比較されていません。正しい対比喪失の誤りです。

問４《傍線部説明・選択肢》
「〈見立て〉」「記号」「翻訳」といった言葉は、いずれも、あるものを別のあるものに置き換えること、なぞらえること、何か

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に見なすことです。本文では、[2]の後に、「閉ざされているからこそ、床に生けられた花はただ一輪で自然の四季を表す」とあります。外界と連続していたら、一輪挿しは、庭の草花の中に埋もれてしまいますからね。閉鎖空間の床の間の〝舞台〟でこそ、〝この一輪で春を表現してみました〟などと言うことができるわけです。ロの「本来の性質を超えて表象のレベルで新たな意味を持ち」がよいです。「表象」は「表現作品」という意味があります。

では、他の選択肢をチェック。イは「一度全てばらばらにし」が×。〝好き、きらい、好き、きらい……〟なんて花びら一枚一枚ちぎるのでしょうかね。記述に反する誤りです。一輪挿しはそのままです。ハはどうか。「新しい色彩を付与」「全く違った生命」がイケマセン。まったく間違いではありませんが、この「新しい色彩」「全く違った生命」は比喩ですよね。比喩による説明は、説明としては一段、落ちると知っておいてください。具体例が説明として、一段、落ちるのと同様に。うちの奥さんを説明するとき、〝にこやかにピアノ指導の仕事に携わる一方、予備校講師である旦那を厳しくバックアップしてくれる存在〟と書くと、かなりよくわかりますね。これを〝まるで太陽である一方、北風のような存在〟では説明としてはボヤっとしてしまいます。日本経済の説明ならGDPの推移や物価指数、株価、失業率を明示しますよね。それを〝どしゃぶりとは言えないくらい〟なんて説明だと曖昧でしょ。だからといって、この「新しい色彩」「全く新しい生命」を比喩ではなく文字通りに解釈するともっとへんですよ。一輪挿しにペンキを塗ってみた、とか新種の花を発見した〝ダイスケバナ・コシバーノ・ヤパナ〟と命名したというようなことになってしまいます。

ニはどうか。「象徴性」はいいね。〝この一輪挿しは秋の象徴・シンボルです〟ってね。しかし、「世界を全てシンボルの宇宙と考える」が×。密室空間を忘れているね。不当な全称判断です。

問５《空欄補充・抜き出し》

問1の3と関連した問題です。茶室にこもって「執り行った、[甲]を高め合う儀式」とほぼ同じ表現が、最終段落の冒頭にあります。「茶室はいわば個の自覚を得たブルジョワジーの私的な祭祀の場所」という表現です。「儀式」と「祭祀」はそっくりな表現です。このように、問われている空欄の周りの表現の類似が、解答のヒント・根拠になります。では、その儀式で何を高めたのか、字数三字から五字で抜き出せば、「個の自覚」となります。なお、前の段落に「〈個〉の意識」とあり、同趣旨ですが、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

六文字で字数オーバーです。「〈個〉」は三文字ですが、「自覚」「意識」といった表現を欠くため、完全解答とは言えません。△です。

模範解答

問１　最初＝そして建築　終わり＝となる。
問２　１＝ロ　２＝ニ　３＝イ　問３＝イ　問４＝ロ　問５　個の自覚

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第四講

（ア）①　（イ）③　（ウ）②　（エ）③　（オ）⑤
（カ）④　（キ）④　（ク）③　（ケ）②　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）相称　（イ）契機　（ウ）装飾　（エ）空虚　（オ）集約
（カ）遭遇　（キ）内省　（ク）対峙　（ケ）判然　（コ）意表

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。